

なぜ室伏高信は文明を論じ続けたのか

報告者 望月詩史（第 13 研究・同志社大学）

本研究は、第 13 研究「近現代日本の文明論に関する思想史的研究」の一環として、主に大正期から昭和戦前期にかけて活躍した評論家・室伏高信の文明論（観）を中心に、同時代のいわゆる「文明批評家」（田中王堂、長谷川如是閑、杉森孝次郎、土田杏村ら）の文明論（観）を思想的に検討することを目的とする。今年度は、室伏高信の文明論の形成と展開について部分的な考察を行った。

室伏は、シュペングラー『西洋の没落』（1918、22 年）やラーテナウの影響を受けて文明に関心を抱き、自らの文明論をまとめて『文明の没落』（批評社、1923 年）を出版した。同書には、彼の文明論の基本的枠組みが示されている。「文明」と「文化」を区別して、前者を「量」、その主体が「都市」であり、「機械」・「工業」によって成り立つとし、一方の後者を「質」、その主体が「田舎（農村）」であり、「精神」・「農業」によって成り立つとした。『土に還る』（批評社、1924 年）以降の著作では、農村、農民、農業などを繰り返し論じていたが、同時に、文明論の立場からファシズムの動向にも注目していた。

1932 年 12 月、室伏は大森から神奈川県津久井郡三沢村に移住した。都会（文明）から距離を置いたことが影響しているのだろうか、この時代に文明を論じた著作を盛んに発表している。この時期の特徴として、現代文明の本質を「技術」と「エネルギー」に求め、その重要性を強調している点が注目される。これらは 1920 年代の文明論に希薄であった視点である。

戦時期及び戦後期の文明論（観）は現在調査中であるが、戦後期にも、「文明の没落」以来の文明と文化の区別、「現代文明＝技術文明」、「エネルギー」（原子力）などを折に触れて論じていることを確認している。

本報告は、「なぜ室伏高信は文明を論じ続けたのか」という問いを設定した。現時点での結論として、室伏は文明を「生活の一般的規律」と理解しており、現代社会の構造を把握するために文明の分析が不可欠であると考えていた点を指摘できる。文明の把握は現代の理解であり、それは同時に未来を予測するための作業でもあった。今後は、室伏がどのような未来像を描いていたのか、また農村移住という生活環境の変化が彼の文明論にいかなる影響を及ぼしたのかについて、戦時期と戦後期も視野に入れつつ検討を進めていきたい。